

『徒然草大全』

— 翻刻と解説 — (一)

大 坪 利 絹

〔解説〕

徒然草の伝本の中に、正徹本系統と常縁本系統とがある事は、今では周知の事であるが、正徹や常縁が如何に徒然草に親炙していたかは、彼等の著述を通じても直ちに領ける所である。「花はさかりに月はくまなきをのみ見る物か」と、兼好が書きたるやうなる心ねをもちたるものは、世間にたゞ一人ならではなきなり。此ころは生得にて有る也。(正徹物語・上)と正徹は兼好の心根に心酔し、「兼好がつれぐ草に云、古今集に、糸によるものならなくと貫之が読みたるが、古今集の中の歌くずとかや申し伝へ侍るなり、今の世の人よみぬべき事がらとは不見と云々。(東野州とうのやしゆう聞書・卷四)」と、東常縁とうのつねよりは兼好の見解を引きつつ貫之歌を弁護し、新古今秋上の俊成女歌、おほあきおほあきのもりの木のまをもりかねて人たのめなる秋の夜の月、の注釈に際し、常縁は又、「兼好法師自書に、月ハまとかなるをのミよしといふへからず。雨後の雲まよりあらハれかねたる、又暁かけて出る月に心すむとかけり」と徒然草百三十七段を引用しつつ鑑賞を加えているのである(東常縁・新古今和歌集聞書)。又、正徹を師と仰いで深く敬慕した心敬も、徒然草十九段「折節の移り変るこそ」の一節「おほしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ」を引いて「む

ねに思ふ事うちさらし侍らねは、腹ふくるゝなとゝ古人も申侍れば（心敬僧都比登里言）」と言ひ、又二十段の「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」や、二十一段の「露こそなほあはれなれと争ひしこそをかしけれ」を引いて「いにしへの歌仙二人此世の事をむつ物語せしに、獨は世に余波のおしく侍るは空のみなりと云、月に別れん事也。獨は世には露のみ心とゝまり侍る（心敬僧都比登里言）」と言つてゐることは、室町期に於ける徒然草章段の区切の考察と、兼好の心情理解のあり方等の上に、大きな示唆を与えてくれるものと言えよう。更に心敬は、徒然草の七段或は百十三段を底に敷いて「兼好法師の云侍り。人は久敷共四十迄とかきぬる、恥かしき事也（心敬私語）」とか、百三十七段を引いて「兼好法師のいはく、月花をば目にてのみ見るものは。雨のよに思ひあかし、散しをれたる木蔭にきて、過にしかたを思ふとこそ書侍る。誠にえんふかく覺侍り。（心敬私語）」とか述べてゐる所から見ても、師の正徹以上に兼好の心情に傾斜してゐたことが窺われるのである。

室町期は、斯の如く徒然草の或る章段について、当時第一級の文人が深い理解を示してゐた時代で、正徹・常縁・心敬の他にも、三條西実隆や多聞院英俊等の貴紳高僧も関心を寄せてゐた事は、その日乗から知り得るのである。

この様に、最初は部分的断章的理解に始まつた徒然草に対する研究態度は、次第に全体的系統的的研究態度へと徐ろに変化し、徳川初期には、全章段にわたる注釈的研究がつくようになる。斯くして『徒然草寿命院抄』・『野槌』・『慰草』といった注釈的研究書が、慶長・元和・慶安の頃に次々と上梓されるに至るのであるが、次にはこうした各抄物を総合して、一覽しやすく比較に便利な形態の、所謂、集成型研究書の出現を見るまでになつてくるのである。その初歩的なものは、明暦・万治年間に出た『鉄槌』・『金槌つれづれの抄』・『徒然草古今鈔』・『徒然草古今大意』であるが、これらは、野槌や寿命院抄の適宜抜粹集成本たる観はまぬがれないのであつて独創的な面が少ない。それよりも次の寛文年間の『徒然草磐斎抄』・『徒然草句解』・『寂寞草新註』・『徒然草文段抄』・『徒然草諺解』等の方が独自性に優れてゐよう。磐斎抄や文段抄等の持つ独創的成果と、初期の寿命院抄・野槌・慰草等三著の成果とを総合集成し

て、真に綜合集成研究書として最初に出現したのが、ここに翻刻しようとする『徒然草大全』である。そしてこの大全開板以後約三十年の間に、『徒然草諸抄大成』と『徒然草集説』が出板され、ここに所謂徒然草諸注集成の三大著が出揃う事になるのである。寿命院抄以後この三大著に至る迄のあらましの事情は、別に本年度の『親和國文』に翻刻せんとする『徒然草摘議』の解説で触れておいたから、ここには重複を避けて省略する。

さて、同じ諸注の綜合集成書であつても『徒然草諸抄大成』の方は、戦前から早く活字翻刻せられ、戦後にも『徒然草解釈大成』の古注の部に全て取入れられて、参看に容易な書物であるに対し、『大全』と『集説』とは、諸抄大成程には大部な書でない為か、活字化せられず、従つて参看も、稍々難しい書であつた。勿論『大全』も部分的には『諸抄大成』に引かれてあるから、それを通じて見る事は可能であるが、すべてが引かれてあるわけではなく、又その引用も忠実なる引用もあり、不忠実な引用もあつたりで、万全を期すという点では、矢張り『大全』そのものの翻刻があつた方がよいと思われる。それに、現在に於ける『大全』の学問的価値に就いて論ずれば、例えば、書中に「私曰」として述べられた説は「筆者の注解にも穩健妥当の説が多く、諸注の集成ではあるが、本書のみが誇る部分に十分研究史上重要な一書であることの意味が見いだされる（富倉徳次郎・三省堂国語国文学研究史大成6）」とされ、従来の諸抄の「要点を整理したもので、諸注集成の先駆的性格をもつ注釈書」であり、「このあたりから従来の注釈研究を整理統合し、学問の体系化をうながす気運が徒然草注釈のなかにも生まれつつあつたことを示唆している（檜谷昭彦・有精堂徒然草講座第四卷）」とか述べられているような価値が認められているのである。このような理由からも『大全』の完全翻刻が今後の徒然草研究に有意義であると思われるのである。

さて、『徒然草大全』は、玄旨法印細川幽斎が、あるやんごとなき御方から、徒然草中の、不審と難義の條々に関する質問を受け、それに対する幽斎の返答を筆記したものでから写しとつた旨が冒頭序文に述べられている。又、古くから三ヶの大事七ヶの習と謂われた秘説口伝も玄旨の筆記には明示して注釈されており、これを出版して世に伝える事

の有益性も述べられている。玄旨説以外の、寿命院抄・野槌・貞徳抄・同慰草・磐斎抄・句解・諺解・文段抄・増補鉄槌・諸家聞書も加えて「此一抄にて事たらしめんため」の出版である由も強調せられ、著者がいかに学問の伝承と継達を重んじ、著述の湮滅逸散を心配していたかが分るのである。特に、

大臣大饗(百五十六段)・真乗院しろうるり(六十段)・車のいつゝお(六十四段)・まかりしてめしける(百段)・真言書の中に(二百十段)・諒闇ぬのゝもかう(二十八段)・放免のつけもの(二百二十一)段)・鳥羽の作道まで聞えたる(百三十二段)・十月を無神月と云事(二百二)段)・さりとしてひたすら(三段)・なつせ(七段)・子孫あらせじ聖徳太子の事(六段)・うちとけたるいもねす(九段)・おほえしか(十一段)・露たかはさる友(十二段)・哥の道のミ古へにかはらぬ(十四段)・空の名残のミぞ惜(二十段)・甲香(三十四段)・目のさめたらんほと(三十九段)・一條なり(三十八段)・くさめくゝの事(四十七段)・こしきおとし(六十一段)・武者をあつむる事(六十三段)しゝらふちへふたつもちノ字体誤認ニヨル誤刻(六十二段)・つちおほね(六十八段)・いやしけなる物(七十二段)・いかなる意趣(七十段)・なさけある三藏(八十四段)・酒一度せさせよ(八十七段)・とうとかりけるいさかひ(百六段)・しはらくもこれなき時(百八段)・斎王丸にまさりてえしらし(百十四段)・あなうらやまし(百五十三段)・何事の式(百六十九段)・心にくかりき(百七十八段)・さぎちやう(百八十段)・勸請の起請(二百五段)・又も申さめ(二百二十二段?)・六時礼讚(二百二十七段)・七ヶ條の自讚(二百三十八段)・八つになりしとし(二百四十三段)

の四十一ヶ條は、諸抄には、未勘或は秘伝として記されていないのを、幽斎説として大全には残らず写し伝える旨を強調している。なお右の()の中の章段数は、翻刻部のそれとは異なっているが、これは現在通行の諸本章段数に改めた結果であることを付記する。

次に『大全』は、諸説の引用に当つては、誤あるものは幽斎説によつて正し、又特に注目するに値しないような凡

短説は註者の名を顕わさず伏名にした事を凡例で断わっている。そして『大全』は本文注釈以外に、兼好伝記を載せ、時代の考証をなし、兼好艷書の事を論じ、題号の由来を述べ、徒然草全体を貫く思想を考えた上に、仏教・儒教・神道に関する諸段を示し、結局『徒然草』は「所詮ハおごりをしりぞけて儉約を守り、心身ともにしづかにして佛道をねがへと云事」を以つて、「一部の宗なり」とする書であると結論づけているのである。

次に『大全』の著者、高田宗賢（但シ、三省堂・国語国文学研究史大成6デハ、むねたか、ト振仮名シテアル）に就いて述べるべきであるが、宗賢（ムネカタ）については、『国学者伝記集成』でも取上げられておらず、人名辞典の類を閲しても徒勞であつた。私の調査能力の不足はさしおくとしても、例えば、大津有一氏の『伊勢物語古註釈の研究』の「第四八、高田宗賢の伊勢物語秘訣抄」においても、「高田宗賢の伝記は明らかでない（昭和六十一年増訂版）」とのみ言われるだけである。この様な情況下での私の粗末な調査なのであるが、ただわずかに知り得た事を、一二備忘の為に書き留めておこう。

富倉徳次郎氏の前記研究史大成6によれば、「山崎闇斎門下の学者である」由であるが（日置昌一編『日本系譜総覧』の「儒学系図」敬義学派に山崎闇斎門として高田末白あり）、檜谷昭彦氏はこの説は誤りであるとして、「貞徳門の俳人・歌人で、京の人」であるとされた（有精堂・徒然草講座第四卷）（『日本系図総覧』の「俳諧系図」貞徳門に高田宗利あり）『和学者総覧』によれば、生国住国は京都、生没年は不明であるが、『長崎先民伝』の二十丁に記載があり、吉兵衛と称し、宗利という名であるとしている。『先民伝』は長崎・盧千里の著で、江戸・原三右衛門（先哲叢談の著者、原念斎）が校を加えた文政二年刻成の上下二冊本。その下巻二十丁に、「高田宗賢。京師人也。善国雅。而来崎教授。干時余父艸拙亦從之学焉」とある。艸拙は著者千里の父であろうか。或は校著の念斎の父であろうか。念斎関係者で艸拙なる人を私は見出していない。さらに『国書総目録』の著者別索引によれば、正方とか末白と称していたようである。著述には、『大全』の他に、『伊勢物語秘訣抄（延宝七年刊）』・『古語拾遺示蒙節解（宝永四年）』・『神武紀

八首和歌抄（元禄十二年）・『中臣祓清明抄（元禄十五年写本）』等があり、各伝本も現存する。『大全』を通じて考えても、幽斎や貞徳の説は尊重しているから、この二人の系統に立つ学者とみておくのがよいだろう。念の為に『俳家大系図』を検索した所、貞徳の系流に「宗利」が出ており、そこに「高田氏、通称吉兵衛、京師芝之圖子ノ人、或曰、後雑髪シテ宗賢ト改メ、師木嶋ノ道ヲ専門トシ、伊勢物語秘訣抄、徒然草大全等ヲ著スト云々。」と稍詳しい経歴が記されていた。貞徳は幽斎の門人であるから、宗賢の系流は右に見たように考えて誤りはないと思う。なおついでを以つて言えば、『大全』には、従前の諸抄が秘伝口決未勘等と口実をつけて庶民に公開しなかつた伝授を、「此習口決の事たびく望しかど、たやすくも申さで終にやミぬ。我にてしりぬ、習き、侍らぬ人くは皆かくあらんことを。まことなる哉。我がためのミとおもふは、聲聞の心とかや。よからぬ事に佛もとかせ給へは、おほく写てひろめんと思へど、其いとまもなく、うつしあやまりは假名物におほき事にて、一字てにハ速にて、一部の義理よの事になれは、これにかぎらず。しかあれば板にゑりいとなミて世々に傳んとおもふ（宗賢の大全序文）」と、公開した宗賢の決意は、中世の秘伝崇拜思想が未だ衰えていない徳川初期に、師の貞徳が、無思慮に中院通勝（貞徳の師）より聴講した徒然草の秘説を「群衆のなかにて大事の名目などをよみちらし侍りける（戴恩記）」態度に、似通う所あり、「一器の水を一器にうつすやうに、口づから伝へ給（戴恩記）」う嚴重な秘伝に属する学問を、事もあろうに下民共即ち一般大衆にむけて、しかも従前諸抄も「此一抄にて事たらしめんために」出版に踏切つた宗賢の決意は、多分に師貞徳の真面目を受けついでのもので、この一点だけでも、諸抄大成や集説と外形は似ていても、精神的には数歩優つており、先鞭の榮譽は認めなければならぬと思う。

次に『大全』の書誌に移る。『大全』は板本としての伝本は比較的多く、『国書総目録』でも、国会図書館をはじめとして学習院大・九州大の図書館等の二十三本の紹介があり、今回翻刻しようとする本も、拙蔵本である。上下二巻十三冊が原態らしいが、拙蔵本で見ると、上巻三冊下巻三冊の六冊に合冊したものになっている。即ち、

上一 七十二丁（内、決談一ガ三十五丁・決談二ガ三十六丁）

上二 五十二丁（内、決談三ガ二十六丁・決談四ガ二十五丁）

上三 八十丁（内、決談五ガ二十六丁・決談六ガ二十七丁・決談七ガ二十七丁）

下一 四十六丁（内、決談下一ガ二十四丁・決談下二ガ二十二丁）

下二 四十六丁（内、決談下三ガ二十一丁・決談下四ガ二十五丁）

下三 五十二丁（内、決談下五ガ二十八丁・決談下六ガ二十四丁）

となつてゐる。表紙左上の題簽（縦十七・五糎、横四・五糎）には「徒然草大全」とあつて四方を二重の黒枠線で囲む。「徒然草大全」の下に「諸抄決談／口傳註入」の割書があるが、富倉氏前出書では、諸抄決談のところを「諸抄聞書」として紹介してあるが、どの伝本に拠られたのか不審である（研究史大成6ノ、二、注釈書目）。又、その刊記紹介も「延宝五年九月 中西九郎兵衛門刊。延宝六年初秋、丁字屋長兵衛再刊か。」とされているが、拙藏本では単に「延寶五年／丁巳九月吉日」とあるのみで、板元は刻せられていない。なお檜谷氏は「関場氏は延宝六年初冬の丁字屋長兵衛開板の本が初版かという。」と紹介されているが、私にはこの辺、諸種の板本を調査してみない限り何とも言えない。（但し、第五十段「応長の比」の『大全』注に「九十四代花園院ノ年号也延宝五年迄三百六十七年也」と、わざ／＼注記しているのを見れば延宝五年開板の何等かの根拠になるかもしれない）表紙は濃紺色、縦二十七糎、横十九糎。内容部は各丁には四方に線枠があり、枠は縦二十一糎、横十七糎で、枠外の天は広く地は狭い。各丁の行数は、序文部は十三行で、各行十五六字から二十字内外。本文部は各丁十七行で、徒然草注釈部分は、徒然草本文部分よりも二字下げにして印刷されている。又、柱刻は、決一から決下六までとなつており、その下に丁数を印刷してある。（附記）大阪府立中之島図書館には『大全』が二種あつて、その中の「二三三・四／九六」番本は、拙藏と同板ながら表紙地などから推して、稍、後の本と認められるが、その裏表紙表一面に「延寶六^戊年年初秋上旬／五條橋通塩竈町／

丁字屋長兵衛開板」とあり、その前頁、即ち本文最終丁には「延寶五年／丁巳九月吉日」とある。十三冊本。裏表紙表面に刊記を貼つたのは後の形で、刊記のない白紙を貼つた拙藏本が前の形ではなからうか。又、他の一本は「二二三・四／一六」番で、題簽は単に「徒然草大全」とあるのみ。刊記は本文最終丁の「延寶五年云々」を削つた後に「攝陽書林／大阪南本町壹丁目／泉屋喜太郎」と埋刻してある。板木は同じ板木の後刷本。六冊本。刊行年月は刻せられてない。

〔翻刻凡例〕

1 底本の忠実な翻刻にとめた。即ち漢字・平かな・片カナも底本通り。但し変体仮名は現行字体に改め、異体字も植字事情により現行字体に改めたものもあるが一々は断わらなかつた。

2 振仮名および清濁、漢文部分の訓点も底本の通り。従つて同語の清濁、仮名遣い等が不統一になったり、誤りと認められる所もかなりあるが改めなかつた。それは推察が容易と思われたから底本を重んじたのである。但し推察がつきにくいような所は(ママ)として示した。又底本の濁音表示は、「。」で示された所(主として徒然草本文部分に多い)と現行の濁音符「ゝ」で示された所が混じっているが、それも底本通りにした。

3 句点も底本通り。従つて誤りと認められる所もそのままにしたが一々断わらなかつた。なお句点を施した方が通読しやすいと思われる所は、一字分空白にして句点にかえた。

4 改行・改頁は底本通りではない。又その指示も行なっていない。

5 底本で二行割書の所は∧ ∨で括つて一行書になおした。印刷の都合のためである。又、(大坪注)として示した所は、底本に勿論無いのであるが、底本の誤りが、推察できず見過されることを考えての事である。

6 底本に絵で示された説明があるが、それらもすべて底本の通りに示した。ただし縮小してある。

7 底本には、誤りと思われる所が、かなりあるが、そのまま訂正しなかつた。ただ翻刻の手落ちではないかと思われる所は（ママ）として、翻刻の誤りでない事を示した。